

雪の記憶、図書館、そして須賀敦子



makeanovel

須賀敦子の本に出会ったのはそれほど昔ではなくて、30歳になろうかという頃だ。

その年いっぱい勤めていた会社をクビになって傷心旅行とでもいうのか、わたしは会社勤めから離れてすぐに激安ツアーで初めてのイタリアへ向かった。その飛行機の中で、「ユルスナールの靴」を読んだ。須賀敦子を読んだのはこれが最初だった。



同じツアーに参加していた博覧強記といった知的な男性が、このとき飛行機の後ろの席からわたしがこの本を読んでいることに気づいて、わたしが「センスのよい読書をする」人間だとみなしたらしく（あとでそう聞いた）、旅の間ずっと話し相手になってくれたのもいい思い出で、須賀敦子のくれたちょっとした贈り物だと思えた。

ところで、わたしはイタリア旅行に行くからイタリアに暮らし、イタリアについて多くを著した須賀敦子の本を携えていったわけではない。事前に全く、何の情報もなく、偶然その本を持

って行った。買ったときもどんな作家の本なのか全く知らなかった。

タイトルに惹かれて本屋で手にして、最初の数行を読んで胸が高鳴るようなときめきを覚え、それを買った。そのときは須賀がイタリアに長く暮らした人だということも知らなかった。

例の同じツアーにいた博覧強記な男性から、須賀敦子には他にも著作があると聞き、旅行から帰ってすぐに図書館で本を探した。当時は故郷に住んでいたもので、あの黴臭くて、トイレの匂いのしみついた図書館で、それは1月のことだったから、きっと雪が舞うような日に須賀敦子の本を探したんだと思う。

故郷の図書館はその後、移転して新築されたが、当時は古びた建物だった。城址公園のお濠のほとりに、苔むしたようにひっそりと図書館は建っていた。図書館は壕に面した石垣の上に建っていたような記憶があるが、それはわたしだけのもっているまぼろしの記憶かもしれない。すべてがもう跡形もなくて、さらに図書館のなくなったその場所に最近では足を運ぶ機会もない。

図書館の対岸の濠に沿った道を歩くと、どろんと重たげに水生植物が陰気にびっしり生えているお濠の向こう側に、朽ちかけた図書館が建っている。図書館はその小径からだと見上げる形になる。窓はどれも真っ暗で人の気配がしないのだった。

その暗い図書館は、しかし開架式であることが一番の魅力だった。新刊は明るいフロアに並んで

いる。しかし古い蔵書も実際に手に取れるように、窓のない倉庫のような部屋ではあるが、ずらっと並んでいるのだった。わたしはその倉庫のような部屋でいったいどのくらいの時間を過ごしただろう。

しんと冷たい雪の匂いをかぎながら、とわたしは回顧する。弱々しい蛍光灯の明かりが、一層部屋を暗く見せているのだが、確かにそこでわたしは「ヴェネツィアの宿」や「ミラノ霧の風景」「トリエステへの道」の単行本を初めて手に取ったのだ。あの出会いからそれほどまだ時間は経っていないが、いったいどれだけ繰り返し読んだだろうか。

図書館の重い須賀敦子全集を何度も何度も借りてページをめくっていた。そしてついに全集の文庫版が出て、気軽に毎日めくることができるようになった。須賀敦子について書かれたほかの作家や評論家の文章も繰り返し読んできた。

でもこれだけ読んでいのに、わたしは何もわかっていないんだという気になる。読むたびに新しい発見があるようでもあるし、発見なんて何もないような気もする。読むのが快樂なので何でも読む。でも読み進めることが怖くなったりもする。今は須賀敦子に出会うことができたことにただ感謝することしかできない。わたしのことを須賀敦子を読んでいるだけで「知的な人間」と過大評価してくれた人もいたように（例の博覧強記な男性だ。彼と仲良くなれたことは当時の交友関係がひろがってわたしには楽しい経験になった）、今のところわたしが須賀敦子から受けた恩恵はこの程度なのかもしれない。いや、本当はもっとたくさんのもをもらっているのに、気づけなくてそれを生かしてないのも確かだろう。でも、何かを分かったつもりには全然なれない。須賀敦子の書き始めた年齢になったら、わたしにも何かわかることはあるのだろうか。冬になると図書館の黴臭さと、雪の匂いとともに、須賀敦子『ユルスナールの靴』との出会いが蘇る。あの本と出会ったとき、わたしはチューリヒを經由して、ミラノ、マルペンサ空港に降り立った。須賀敦子の暮らした、あの霧のミラノに。